

2019/06/30

「あなたの中心は何？」

カメラの焦点が合わなければ写真がピンぼけになってしまうように、私たちの人生もきちんと焦点を合わせることが重要です。私たちの中心・軸とはいったい何なのでしょうか。私たちは、何に焦点を合わせて生きれば良いのでしょうか。

イエス様はパリサイ人に対して、次のように言われました。

「ところで、あなたがたは、どう思いますか。ある人にふたりの息子がいた。その人は兄のところに来て、『きょう、ぶどう園に行って働いてくれ。』と言った。兄は答えて『行きます。おとうさん。』と言ったが、行かなかつた。それから、弟のところに来て、同じように言った。ところが、弟は答えて『行きたくありません。』と言つたが、あとから悪かつたと思って出かけて行つた。

ふたりのうちどちらが、父の願つたとおりにしたのでしょうか。彼らは言った。「あとの者です。」イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。取税人や遊女たちのほうが、あなたがたより先に神の国にはいっているのです。というのは、あなたがたは、ヨハネが義の道を持って來たのに、彼を信じなかつた。しかし、取税人や遊女たちは彼を信じたからです。しかもあなたがたは、それを見ながら、あとになって悔いることもせず、彼を信じなかつたのです。」(マタイ 21:28-32)

イエス様は、このたとえで、父親に反抗した弟と取税人や遊女を重ねておられます。当時の取税人や遊女とは反社会的な存在で、罪人を代表する言葉です。この話では、パリサイ人のように生きるよりも反抗するほうが良いと言つているように思われますが、それはどのような意味なのでしょうか。

■人の心が求めているものとは

人が反抗する理由は、実は本人にもわかつていないものです。なぜなら、人が意識できることは表面上のものでしかなく、その下には必ず裏の原因があるものだからです。それは、潜在意識とか深層心理とか呼ばれています。自分でも理由がわからないけれど、なぜか腹が立ち、なぜか反抗したくなるのです。

なぜ人は反抗したくなるのか、その理由を探るために、人が物事を意識する基本的な構造を考えてみましょう。

人間が何かを意識できるのは、前提となる運動があるからです。運動とは、何かを目指す動きのこと、たとえば「これは食べものだ」と意識するのは、「お腹が空く」という運動があるからです。もし人が、お腹が空かない存在であれば、食べものを意識することはできません。

ですから、人がいろいろなことを意識できるのは、何かを目指す運動が私たちの中に初めから存在しているということです。その運動について、哲学者たちは様々な仮説を立てて検

証してきました。ある人は、何らかの出来事の因果関係によって人は動いていると考え、ある人は良心が人を動かしていると考えましたが、どれも十分な答えを得ることはできませんでした。さらに哲学の探求は続き、承認欲求が人を動かしていることが発見されましたが、なぜ人は承認欲求を持っているのか、その疑問を解明しなければ、これも真理かどうかはわかりません。

この議論に最終的な答えを与えることができるるのは、哲学ではなく、神学です。人はどのような存在かということは、どのように造られたかということであり、哲学においても、最終的には聖書を通してしか解決できないという結論にたどりついたのです。

神はご自分のいのちで人の魂をお造りになりました。つまり、私たちは生まれながらにして、神にとらえられているのです。そのために、私たちの魂は神を慕い求め続けています。これが、私たちの中心になる運動です。この神を求める運動は、地球の自転のように、止めることができません。神が一度始めた運動を止めることは、誰もできないのです。

つまり、神を求め、神に近づこうとする運動が、私たちに意識をもたらし、私たちが生きる根拠になっています。神を求める運動に逆らって進むと、生き方がぶれてあいまいになり、不安や虚しさが生じます。聖書はそれを罪と言っています。

もっとも、魂が神を求めるといつても、その神とはどなたなのか、神の名を知っているわけではありません。私たちの魂が求めているのは、神そのものであり、神とは時間にも空間にも何ものにも制約されない自由です。ですから、神の名を知らない私たちが神を求める、それは、自由・永遠を求める運動になります。この運動こそが、私たちを動かし存在させている中心です。

■反抗のからくり

人は自己ではそれと気づかぬまま神を求めて生きており、神が誰なのかわからない状況においては、神の本質である自由を求めて生きていることがわかりました。そのため、その自由が制約された時、人は反抗したくなるのです。これが、反抗のからくりです。

親が「〇〇しろ」と言うと反抗したくなるのは、自分の自由が制約されたと感じるからです。冒頭のたとえ話の中で、弟は「そんなのめんどくさい。そんなことをしたら自分の自由が奪われる」と思ったわけですが、私たちが社会等に反抗する思いを持つのも同じです。すべての反抗は、強制されたくない、自由を制約されたくないという思いから発するものです。しかし、実はそれは神を求める運動が妨げられていることへの反抗なのです。神が目に見えないため、人はこのことに気づきませんが、反抗するのは、神を求めていることの表れなのです。

たとえ話の中の兄は、父に対して反抗を表しませんでした。この世では、それを良い子と称することでしょう。一見すると素晴らしい人物のようですが、神の目から見ると、彼は現実に妥協して、神に近づくことをあきらめている人です。この世界には自由がないのだとあきらめ、この世に合わせて生きているのです。魂が神を求めているにも関わらず、それを放棄し、神を求める運動に逆らって生きているのです。

よく教育の分野で「良い子は危ない。むしろ反抗する方がいい。」などと言われますが、神

との関係においても同じことが言えます。魂の求めに従ってこの世界で自由を求めて生きようとすれば、必ず制約を受けますから、反抗が生じるのは必至です。その時は、なぜ反抗しているのか、自分でわからないながらも、魂は真剣に神を求めているのです。聖書に登場する人物も、真剣に反抗している様子が記されています。

いずれにしても、たとえ話の中の弟が反抗したのは、自由を求めているからです。自由を求めるのは、魂が神を求めているからです。私たちの自由を認めないこの世界に対して、無意識に反抗するのは、神を求めているからです。取税人と遊女は、社会に対して反抗している人々です。ただ、それは実は神を求めているということに気づいてはいません。

■何が弟を変えたのか

さて、弟は自由を求めて父に反抗しましたが、そのままではありませんでした。あとから「自分が悪かった」と思い直し、彼は父のもとに立ち返ったのです。何が弟の心を変えたのでしょうか。

1. 反抗は無意味だと知った

人の自由を制約しているのは、人でも環境でもなく、この世界を牛耳っている「死」です。私たちは、「死」によって永遠と自由を失い、有限性の中に閉じ込められたのです。「死」こそ、私たちの自由を奪っている敵です。

彼は、反抗した結果、人に反抗しても何の自由も手に入らないことに気づきました。自由は、信仰によってのみ手に入るものです。弟は、反抗しても自由は手に入らないことに気づき、反抗は無意味で虚しいものだと気がついたのです。

2. 中心にある運動を引き受ける

弟が、「悪かったと思って父のもとに戻った」とは、自分の中心は神であることに気づき、神中心に立ち返る様子を象徴的に表しています。

私たちの中に存在している運動は、神に近づこうとする運動です。そのことを自分の運動として受け入れるので。私たちが求めている自由や永遠は、信仰でしか解決できません。そのことに気づき、それを信じて神にゆだねて生きていく決心をしましょう。あなたは、自分の中心を信仰によって手に入れようとしているでしょうか。そうではなく、自分の力で何とかしようとしているでしょうか。自分の力でなんとかしようとすることが反抗です。弟は、信仰によって生きる生き方に変えたのです。

これに対して、兄は、「行く」と言って行きませんでした。これも反抗ですが、彼は世の生き方に合わせて、神と生き方を合わせることに反抗しました。魂は神に近づこうとしているのに、その魂の声に反抗したのです。

世に合わせると表向きは人から愛されます。聖書はそれを「世の心づかい」と呼んでいます。人から良く思われる生き方を選択し、神と共に生きることに反抗して心を神に向かない生き方です。しかし、私たちの魂が求めているのは神です。それに逆らうと心に虚しさが生じ、どうにもならなくなります。自由が制約されることに反抗して自由を求めるとは、神を

求めている表れです。そもそも問題の本質は、中心からずれているところにあるのですから、それを軌道修正する必要があるのです。私の中心、私のすべては神であると認め、信仰で修正する必要があるのです。

弟は、私の中にいるのは、私ではなく神であったと気づき、神のもとに立ち返る決心をしたのです。パウロもそうです。

3. 神を求める生き方とは

神を求めるとは、具体的にどのような生き方になるのでしょうか。自分が神を求めていることに気づいたら、そのために何をすれば良いのか、一人一人祈って進みましょう。

イエス・キリストは、この世界で神を求めるとは、人を愛することだと教えておられます。何をするか、具体的な行いは一人一人変わってきますが、そのことを通して人を愛することを選択しましょう。人を愛することに反抗する思いがわいてきたら、人を愛する神の愛を求めてみましょう。

神が教える愛は、相手が天国に行くように手引きすることです。どんなに人から感謝されても良く思われても、愛がなければ何の意味もないと聖書は教えてています。愛とは、「自分の中心は神である」とあなたが知ったように、それを伝えることです。それが福音を伝えるということです。

何をしたら福音を伝えることができるか、他の人が救われる手助けができるか、それを考えて生きることが中心の定まった生き方と言えます。人を救うのは神のなさることですが、真実に人を愛するならば福音を伝える生き方になるのです。

この世界のあらゆる場所で、地の塩、世の光が必要です。自分の職業や遭わされた場所で福音を伝えようと生きるなら、中心はぶれていません。しかし、人から良く思われることが目的ならば、表向きは立派でもそれは神を拒否した生き方と言わざるを得ず、人生の中心からずれてしまっています。

パリサイ人達は、ヨハネのバプテスマを拒否しましたが、取税人や遊女達は従いました。弟はどのように神に従ったと言えるのか、それは自分の中心にある心の声に耳を傾けたことによるのです。

あなたの中心は、何でしょうか。何があなたにとって重要でしょうか。神が備えた中心に逆らって生きていかないでしょうか。もし、反抗していると思ったら軌道修正しましょう。あなたの中心にある運動、そこに向かう心の声に耳を傾け、身をゆだねて生きましょう。自分の力で自由を手にしようとすると、反抗しか生まれません。まずは中心をしっかりと持ちましょう。そこから生まれる選択、行動が正しい生き方です。人生の問題解決は信仰にあります。

人の苦しみの原点は、魂が神を求めていたのに手に入らないことです。それは信仰によらなければ手に入りません。人が反抗するのは、自由を求めているからであり、自由を求めているのは、神を求めていたからです。そのことに気づくところに問題の真の解決があります。

神は、反抗しても腹を立ててもいいから、何を求めていたのか、心の声を聞いてほしいと願っておられます。弟は反抗しましたが、真剣に考えて、神のもとに立ち返りました。あな

たは、自分の魂が求めているものに逆らっていないでしょうか。本当の反抗は神を求めることがあります。取税人や遊女は、一見、社会に反抗していましたが、それは神を求める運動が妨げられることへの反抗で、魂は神を求めるを受け入れていました。本当に反抗していたのは、パリサイ人です。今一度自分の中心に何があるのか見つめ直して、それに逆らわない生き方をしましょう。